

つちにんぎょう
土人形

岡崎むかし館蔵

土人形は節句物、縁起物として、江戸時代から各地で作られ、子どもの成長の節目ごとに買い足し、雛祭りなどで飾りました。人形の題材は土雛のほか、天神、武者、花魁、恵比須、大黒など子どもの健やかな成長や招福を願うもの、また歌舞伎などの演目を題材とするものが多くあります。

三河地方は、良質の土に恵まれ、古くから三州瓦の産地であったことから、明治中頃～大正時代には「三河土人形」と総称される土人形の一大製作地でした。人形は鬼板師と呼ばれる鬼瓦や飾り瓦を作る職人によって型を起し、その型に粘土を入れて形をつくり、乾燥させて焼き、彩色します。農業や瓦製造の副業として、多くの人形が作られたようです。旧碧海郡棚尾町や大浜町(現碧南市)などは、多くの工人を輩出したことで知られていますが、岡崎市内でも、矢作や鴨田で土人形が作られていました。かつて当地の各家庭では、土人形を節句人形として一般的に飾っていましたが、日本経済が飛躍的に成長し始めた昭和30年代初め頃(1955～60)から、現代のような豪華な衣装人形が好まれるようになり、土人形を衰退させていったようです。

飾りのないくらしの中から生まれた素朴な土人形には、温もりだけでなく、今のくらしが忘れてしまった大切な何かを伝えているような気がします。